

した。極地研で隕石の薄片を作らせていただくことになり、もちろん貴重な試料であるため、どのくらいの量を薄片にしているのですか？と海老原先生に伺ったとき、お任せしますと言われ、山口先生にこんなに使っているの？と言われたときの緊張感は今でも忘れられません。極地研に出張したときはよく夜は飲み连接到いていただき、人生のいろはや研究生生活におけるメリハリの付け方を教えて頂きました。

そんなこんなで、修士課程では主に化学分析を行っておりましたが、分析した隕石を通して、小惑星への衝突物について考えたり、その薄片中で見られる外部から混入した金属片を眺めるうち、どうしたら天体って壊せるのかしら？と考える機会が増えました。それに伴い、衝突破壊により小惑星から隕石が排出される物理プロセスについて強い興味を持つようになりました。そこで、進路に迷った挙句、博士課程では、名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻地球惑星物理学講座(名前長い…)に移ることになりました。このとき、名古屋大学の渡邊誠一郎先生には、今後についての相談にのっていただいたりと大変お世話になりました。そして偶然にも、私が入学した年に、北海道大学から天体衝突の専門家である荒川政彦先生が名古屋大学に来られるという良いタイミングに見舞われ、衝突銃を用いて、天体衝突を模擬する衝突実験を行うことができる運びとなりました。名古屋大学の二段式軽ガス銃は、非常にコンパクトなサイズですが、弾丸速度は5km/s近くまで加速することが出来ます。私が博士論文を書き上げる上で、研究の肝となる銃ですが、名古屋の気候のせいで、梅雨の時期はよく錆まみれになり、ごしごし磨いたのも今ではいい思い出です。私の博士論文は、指導教官だった荒川先生と雑談してい

るときに、天体衝突について、天体内部構造の影響を考えてやったらどんな結果になるのでしょうか？と軽い気持ちで言ってみたことから始まりました。同じ衝突条件で内部構造だけ変化させて実験してみたところ、明らかに壊れ方や破片速度が異なることが分かりました。その結果にかなり感動して、実験室でおお、もしかしたらいけるかもと一人で喜んだ覚えがあります。

荒川先生の第一印象は、やさしくて温和そうな人だなと感じました。日常生活で起こるちょっとした現象にも興味を示され、うれしそうに、きみこれどう思う？と学生にきさくに話されていました。が、研究となると表情が一転し、厳しく指導していただきました。また、時には渡邊先生にもご指導いただきました。あまりにも鋭いコメントに何度うっと言葉につまったことか分かりません。博士課程で、それまでとは違う、全く新しいことに挑戦させていただいたため、何度かくじけそうになったこともあります。ポジティブシンキングもはやこれまで(後輩の名言から引用)と思いましたが、先生方が辛抱強く指導して下さったおかげで、なんとか立ちどころになりました。また、研究以外では、名古屋大学は学生間の仲が良く、後輩、先輩方と週末によく飲みにいきました。教員の方も交えて学内で飲み会をすることも少なくないので、普段はちょっと恐れられている先生とも仲良くなれたり、良い思い出がいっぱいです。この学生生活ともおさらばかと思うとさみしくもありますが、今後しばらくは研究に打ち込んでいきたいと思えます。みなさまどうぞこれからもよろしく願いいたします。

鈴木 絢子(東京大学地震研究科)

遊星人の読者の皆さま、初めまして、鈴木絢子と申します。私は2008年9月に東京大学理学系研究科地球惑星科学専攻で学位を取得し、現在は東京大学地震研究所に所属しています。大学院生時から地震研究所に滞在していたためか、研究内容のせいか、もしかすると性格上の問題かもしれませんが、惑星科学会で影の薄い自分に長い間悩んでいました。周囲の先輩や同期



のNew Face記事を読んでも、まさか自分がそこへ投稿するとはとても想像できなかったので、今回New Face執筆依頼をいただいたときには、ディスプレイを抱きしめて涙したくらいです。このNew Face記事が今後の交流のきっかけとなり、多くの方に知っていただければとてもうれしいです。

私は修士・博士課程を通じて、火星の流動化クレーターの研究をしていました。火星に存在するクレーターの多くは、不思議な地形のエジクタを持っています。この形成過程がわかれば、クレーター分布を調べることでグローバルな地下水分布や大気圧の時間変動などを制約することができると考えられており、長年に渡って研究が続けられてきました。

大学院入学以前はただ漠然と「観測・測定データを大事にする研究がしたい」と思っていた程度でした。話を聞くのが好きなのとミーハー心も手伝って、本当に様々な研究室を訪ねてお話を伺いましたが、最終的にその当時探査が最も盛んな惑星の一つで豊富なデータ量がある火星の研究をしようと思い、栗田先生の研究室へ進学することに決めました。その後、連合大会のキッチン地球科学(キッチン地球科学のコンセプトについては、栗田さんのウェブページをご覧ください)で実験に関わったことから実験のおもしろさに目覚め、修士の間は流体アナログ実験を行っていました。どんな研究でも同じだと思いますが、アナログ実験にもアナログ実験なりの困難があり、その困難を克服するところに喜びがあると私は思います。実験の困難の一つは、すぐには変えられないパラメータがある点でしょう。実験してみて「じゃあ粒子の密度を2倍にしたらどうなるかな」と思ってもすぐにはできません。径や形が同じで密度が2倍の粒子を探さなくてはならないのです。それを他の人が思い付かないような観点で探すところが腕の見せ所と言えるでしょう。私たちも、火星表面と実験室でレイノルズ数やシールズ数と言った無次元数を同じにするため、スパイスの店で様々な種類のマメを買ってきて実験していました。もちろんマメ特有の失敗も数々やりました。実験後にマメの入った水槽を放置して、マメを発芽させてしまったこと。さらにそれを腐らせてしまったこともありました。ものすごいニオイの水槽を洗って始末して下さった熊谷一郎さんには一生頭が上がりません。

博士課程になり、やはり火星のデータを使った

研究がしたいと考えていたところ、栗田さんがD. Baratouxさんを紹介して下さいました。彼は、若手ながら最も精力的に研究をしている火星研究者の一人です。共同研究だけでなく、21世紀COEプログラムの海外インターンシップ制度を利用して3ヶ月間フランス・トゥールーズに滞在することもできました。フランス語は一言も話せないまま不安だらけの渡仏でしたが、Baratouxさんをはじめ研究所の心優しい仲間たち支えられて楽しい研究生活を送ることができました。火星だけでなく様々な現象に興味があり、仕事も早い彼との共同研究は、本当に刺激的で多くのことを学びました。

博士課程修了後は、地震研究所に所属しながら新領域創成科学研究科の杉田先生のもとでTAのアルバイトをさせていただきました。TAというのは出しゃばり過ぎず引き過ぎずのさじ加減が難しいなあと感じましたが、学生さんと関わることで自分の知識を洗い直すきっかけにもなりましたし、とても良い経験になりました。初心を思い起こし活力をもらうことも一度や二度ではありませんでした。またこの間地震研究所の金子先生の赤外カメラを使った遠隔観測装置の開発にも少しだけ関わり、微力ながらも地震研に貢献することができたのでほっとしています。やはり地球では観測場所にまで(ほとんどの場合)行けるため、議論してみても感覚の違いに驚き、柔軟な発想をすることの大切さを感じました。

こうして振り返ってみますと、私の研究生活における大きな流れは、やはり周囲にいる人との交流でできていたように感じられます。私は悩んでも仕方ないことを悩んで立ち止まってしまうことがよくあるのですが、声をかけて下さった方、愚痴を聞いてアドバイスを下さった方々のおかげで、こうしてNew Faceを書くところまで来ることができました。これまでお世話になった方のご恩に報いるためにも、今度は私自身が学生さんや周りの人々に良い流れを作れるような研究者になれたらと思っています。遊星人読者の皆さま、今後ともよろしくお願い致します。